



宇喜多の捨て嫁
木下昌輝/文藝春秋/1836円

山内昌之

明治大学特任教授・国際関係史

戦国時代きつての梟雄の 繊細な内面を立体的に描く。

宇喜多直家といえは、戦国時代きつての梟雄として知られる武将である。勇たちや近隣大名を仕物にかけるなど、返り忠や謀殺を情として恥じなかったというのが定説である。しかし木下昌輝氏は、直家の外見の非道さが幼少期の異常な体験に起因すると説くことで、内面の繊細さを小説として立体的に描くことに成功した。

各短編は、直家の祖父が主君の誅殺に遭った拳句に、直家とその母と思わぬ流転の人生をたどる話と関連する。そこでは、やがて主君の浦上宗景の人質となった娘の命をもてあそぶ姿に殺意を抱き、力を蓄えながら他者に報復を加え、「尻

はす」という業病にかかつて衰弱しながらも、権謀術策の限りを尽くす直家の姿が多角的に描かれている。どの作品にも、娘を嫁がせては婚家を攻め、陰謀で他家の家中をばらばらにする直家の政治力や、それに踊らされる武士にまつわる悲喜劇が繰り広げられる。

「松之丞の一本刀」は、直家暗殺を謀った宗景の子が夢想の抜刀で返り討ちになる小説である。瀕死の直家の判断力と反応の速さには驚かされる。「五逆の鼓」は、政治や戦さよりも鼓に秀でていたために、武将からお伽衆に転落した一重臣の数奇な生涯を描く。末尾になつて、最初に直家の抜刀術の犠牲となった人物が、またしても登場すること、小説全体に余韻めいた深みと陰翳を与えている。

八十年の視座で考察する「東京五輪」。

幻となった一九四〇年、アジア初の開催となった一九六四年、そして来る二〇二〇年。東京と五輪を語るうえで重要な三つの年を中心に、招致活動から開催(四〇年の場合は返上)にいたるまでの流れと、インフラを含む施設建設を、新旧地図や写真をふんだんに用いながら考察する。東京の発展にオリンピックは本当に寄与したのか。過去を緻密に辿ることで、見える景色がある。

1940年・1964年・2020年
地図で読み解く東京五輪
竹内正浩/KKベストセラーズ/1080円



今月の東京本

町の本屋さんにはどこへ行く。

出版不況と言われて久しい。とりわけ町の書店で売れなくなった。本書はアマゾンやブックオフの店頭、「読書はなれ」だけでは説明できないその構造不況を、ひとつひとつ丁寧に解き明し、さらに活気のある新形態の書店の事例を紹介することで、書店の新しい可能性を示している。劇的な処方箋はない。けれど、書店ができること、出版社ができることを、我々は考え続けたい。

「本が売れない」というけれど
永江朗/ポプラ新書/842円



東京が誇る旧市街神田の魅力がここに集結。かつて東京の中心だった「万世橋」の歴史を軸に、歴史・建築・鉄道という複数の視点から神田の魅力を集めた、まち歩き本。交通博物館の跡地にオープンしたマーチエキュート神田万世橋、船で楽しむ神田川・日本橋川の水上散歩、いまも残る一九二〇年代の看板建築など、視点は多岐にわたり、下町、蕎麦屋、神田明神だけではない神田の魅力が満喫することができる。

神田万世橋まち図鑑
東京ルーツ！神田のまち巡り40
神田万世橋まち図鑑制作委員会
ブリックスタジオ/1944円



空から見た絶景鉄道
吉永陽一/洋泉社/1620円



「空鉄」の傑作選。

近年、鉄道写真の中で人気を集めるのが「空から撮った鉄道写真」。略して「空鉄」。鉄道そのものはもちろん、地形や線形まで浮かび上がり、いつまで眺めていても見飽きない。浜名湖の入江を駆け抜けるトビオオのようなN700系、十以上の新幹線が連なる早朝の東海道新幹線大井車両基地など、空鉄ファンも納得のベストショット決定版。

散歩人による 散歩人のための手帖。

散歩ガイドとスケジュール帳が一緒になった、いままでありそうでなかった一冊。月刊カレンダーに、国木田独歩や種村季弘ら、まち歩きを愛する作家たちの名文が添えられているほか、月ごとに異なるテーマの散歩案内、西荻窪や谷根千をはじめとする個性的なまちのイラストマップなどがおさまられており、散歩人の心を絶妙にくすぐる構成にぐっとくる。

東京散歩手帖 2015
リトルモア/1728円

